

異世界で婚活はじめました

## 登場人物 紹介

アビゲイル・キャリスター  
カインの妻。明るく元気な  
元メイド。外見だけでなく  
内面も美しい女性。

カイン・キャリスター  
騎士団の団長で、親切な  
人物。結花の異世界での  
身元保証人となる。

### 素敵な旦那さま候補たち

ジェイ・マクミラン

城に勤める年若い法務官。  
素直で純粋な  
癒し系の青年。

ルーク・ロイナーゼ

カインの部下。  
精悍かつ爽やか、騎士の  
お手本のような男性。

フェンド

王都で人気の仕立て職人。  
金髪に緑の瞳の  
優しげな男前。

レイナード・ロゼフィン

グラン王国最強の魔術師。  
絶大な力と完璧な美貌を  
併せ持つ。通称「泣く子も  
黙る魔術師長」。

はせがわ 結花  
長谷川結花

突然、異世界にトリップしたOL。  
自分をフッタ婚約者がいる日本  
には戻らず、この世界で玉の輿  
に乗ろうと決意するが……

## 目次

異世界で婚活はじめました	7
プロローグ 婚約者と別れました	8
第一章 新しい環境にやってきました	15
第二章 出会いを求めて転職します	61
第三章 仕事が忙しくて、婚活なんてできません	86
第四章 異世界で初めての合コンです	128
第五章 思いがけず告白？ されました	164
第六章 結婚まで前途多難です	176
第七章 結婚の挨拶にいけます	217
エピローグ 幸せになってみせます	230
おまけ 魔術師長様と部屋付きメイド	235
番外編 異世界で新婚はじめました	245
異世界のオトコ、連れ帰りました	246
逃がした魚は大きかったようです	267
実家に帰らせていただきます	279

異世界で婚活はじめました

プロローグ 婚約者と別れました

——最っ低！

初めて本気で人を叩いた手のひらはジンジンとした痛みを訴えるが、それ以上に心が悲鳴を上げていた。

足早に歩きながら、心の中で何度も毒づく。

昨日からどれだけ呪いの言葉を吐き出したことか。

手で涙を拭うものの、一度決壊してしまった涙腺は簡単には元に戻らない。すでに目や鼻は赤くなっているだろう。

そんな顔を誰にも見られたくなくて、エレベーターではなく非常階段を使って下まで降りることにした。ここは、十八階建てのマンションの十四階だ。この真夏の暑い最中、階段を使う物好きはおらず、一人、無機質な造りの階段を降りる。

一段、また一段とゆっくり歩を進めながら、もうこのマンションに来ることはないだろうと思うと、また涙が込み上げた。

——婚約した後に、彼が買ったマンション。

「少し気が早いけど、結花と一緒に住もうと思って」

照れながら、誕生日おめでとう、と言って銀色の鍵を渡してくれたのが五月。

私の二十六歳の誕生日だった。

プレゼントのつもりなのだろう、鍵には赤いリボンが結ばれている。少し右上がりになっている癖のある結び方は、彼のちようちよ結びの特徴だ。

そのリボンをチョンと指先でつつきながら「相変わらずちようちよ結び、下手ね」とからかった私に、「じゃあ、これからは結花が結んでくれよ」と、スネたように口をとがらせる彼。そんな風にふざけ合っていた幸せな日々。

年内には私もこちらに移る予定だった。

それなのに、どうしてこんなことになったのだろう。

事の始まりは昨日の午後。

私は三年間付き合っていた婚約者から、突然、別れを告げられた。

婚約者であった高村圭介とは会社に入ったときに知り合った。氷河期と言われていた当時の就職難を何とか乗り越え、意気揚々と働き始めた中堅の食品メーカー。同期だった私たちは、一緒に残業をしたり飲みに行ったりしているうちに自然と仲良くなり、圭介の告白をきっかけに交際するようになった。

その後、順調に交際を続け、圭介からプロポーズされたのが今年のクリスマス。その頃にはイベントといっても彼の部屋でケーキを食べたり映画を見たりと、まったく過ごすことが多かったのだが、その日は突然、彼が「レストランを予約してある」と言い出した。圭介に連れられて向かった場所は、予約を取るのが大変なことで有名な三ツ星レストラン。さすがに何かあるなど予想はしていたものの、実際に綺麗な輝きを放つ指輪とシエフからのサプライズケーキを目の前にしたときには、嬉しくて涙が溢れそうになったものだ。

ところが土曜日の昨日、家でのんびりとくつろいでいた昼下がりに。

デートの約束などしていなかったのに、いつもの場所に来てくれないかと圭介からメールで呼び出された。突然のことにどうしたんだろうと思いつつも、行きつけの喫茶店に向かう足取りは軽いものだった。

カラン、とどこか懐かしい音を立てる喫茶店のドア。

すでに席に座っている圭介を見つけたとき、その強ばった表情に不安が胸をよぎった。

「別れてくれないか」

コーヒーを運んできたウェイトレスがいなくなった途端、唐突に切り出された。

すぐには彼の言葉が理解できなかった。金曜日に会社で会ったときもいつもと変わらない様子だったし、日曜日だってデートの約束をしていた。それなのに別れてくれだなんて言われる理由が、思い当たらない。

だが続けて彼が言った言葉に、私は考えることを放棄した。

「浮気相手に、子供が出来た」

私の顔も見ず面倒臭そうに言った圭介に、腸が煮えくり返る。

手にしていたコーヒークップを投げつけそうになるものの、周りの目が気になって何とかこらえた。怒りに震える手を、コーヒークップを強く握りしめることでごまかす。

流行りのカフェとは違う、落ち着いた雰囲気の内。騒ぎ立てるような客はおらず、そこが気に入っていたのだが……その静けさゆえに周囲の客に会話は筒抜けだ。

これ以上みつともない姿を見られたくない。

その一心で、わかったとだけ言い残し、圭介を置いて店を出た。足が鉛のように重かったこと以外、何も憶えていない。どうやって家に帰ったのかさえも。

一人暗い部屋でひたすら泣き続け、目が真っ赤に腫れる頃、ようやく落ち着きを取り戻した。そして、彼の思い出の品を捨ててしまおうとして、気が付いた。

彼の部屋の鍵を持っていることに。

圭介は、浮気相手に子供が出来たと言っていた。

おそらく二人は結婚するのだろう。それならやはりこの鍵は、浮気相手を持つべきだ。

頭では冷静にそう判断しているものの、心は再びジクリと疼き出す。圭介とまだ見ぬ相手への嫉妬と憎しみが膨れ上がる。『わざわざ返してやる必要も義理もない。ゴミの日に捨ててやれ』。頭の中でそんな声がした。

だが鍵を捨てたところで、どうせ圭介とは会社で顔を合わせなければならぬのだ。それならば、今のうちに話をつけておきたいことがあった。

——慰謝料。

別れるにしても、婚約者だったのだから彼にそれなりの償いを求めたい。私一人が泣き寝入りなんておかしいだろう？

そう思つて、泣き腫らした顔が幾分マシになっているのを確認した今日、彼のマンションを訪れた。慣れ親しんだ部屋とはいえ、もう他人。鍵は使うことなくインターホンを鳴らした。

「はあい、どなた？」

予想していた低い声ではなく、高い女の声が機械を通じて聞こえ、思わず固まる身体。

昨日別れ話をしたばかりなのに、もう浮気相手がこの部屋にいるとは思つてもみなかった。

だが、それ以上に私を動揺させた理由。

「島崎、杏奈……」

昨日は、浮気相手が誰なのかまでは聞けなかった。人の多い喫茶店で話すには、私のプライドは高すぎた。未練がましく問い詰めるなんてマネ、出来ない。それに知りたくとも思つていなかった。わざわざ自ら傷を抉るようなことはしたくない。

だが我が物顔で応対に出た声で、すぐにピンときた。

私とソリの合わない五つ下の後輩。短大を出て就職したばかりの女の子。可愛らしい外見とは裏腹に、かなり悪質な内面を持つ彼女。

彼女の『癖』は女性社員の間では有名で、私だつてわかつていたはずなのに。

——他人のモノを欲しがる子。

浮気相手が彼女だと理解した瞬間、ここに来たそもその目的などすっかり頭から消し飛んだ。応答がないため、外の様子を確認しに来たのだろう。応対した彼女の代わりに扉を開けて顔を覗かせた圭介の頬を、力任せに引っ叩く。

静かなマンションの廊下に響く、パンツという乾いた音。

痛みに顔をしかめた後、目の前の私に気付いて固まる圭介。

握りしめていた鍵を力任せに投げつけると、彼の胸に当たったそれは、玄関の石畳に吸い込まれるように落ちていく。

それを最後まで見届けることなく踵を返すと、私は足早にその場を後にしたのだった。

悔しい。憎らしい。許せない。そんな暗いドロドロとした感情が涙となつて込み上げる。

拭つても拭つても溢れ出る涙は、視界に入る全ての物の輪郭をぼやけさせた。

「あっ」

気付いたときにはすでに遅く、身体は大きく傾いでいた。

——階段を踏み外した。

何てついてない日なんだろう。

ぐんぐんと迫る硬いコンクリートの床に、ギュッと目を瞑る。襲い来るだろう強い衝撃に備え、

身体にも自然と力が入った。

ジェットコースターが落下するときに感じる、内臓が持ち上がるようなゾワリとした感覚。それに加えて奇妙な浮遊感を覚えながら、地面に激突する瞬間をひたすらに待つ。

だがいくら待っても衝撃は訪れない。

スローモーションのように感じる、と言っても限度がある。遅すぎるのだ。

目を開けた途端に床とキスだけは勘弁してよねと祈りつつ、恐る恐る薄目を開けた私の瞳に映った風景。

そのあまりの異様さに、私は先程までの恐怖も忘れて勢いよく目を見開き、辺りを見渡すのだった。

## 第一章 新しい環境にやってきました

零れ落ちそうなほどに見開いた目に映る、見たこともない風景。

目の前には汚れた灰色の壁。ぐるりと見回すと、それらの壁に囲まれた、薄暗くてとても狭い通路が、左右に伸びている。天井はそれなりに高さがあるものの、窓一つないせいでひどく圧迫感がある。

右側の通路には頑丈そうな木の扉が三つ見えた。どうやら、どこかの建物の中であることは間違いないさそうだ。左側の通路は少し先で曲がっていて、その奥は見る事ができなかった。

——そんな場所に、私は『立っていた』。

階段を踏み外したはずなのに、何事もなかったかのように立っている。

しかもどう考えても、ここはあのマンションではない。

状況が全く理解できない中、ただそこに立ちつくす。一縷の望みを懸けてもう一度左右を確認するが、状況は一ミリたりとも変わらなかった。

夢か現かの判断もつかぬまま、震える指先でそっと目の前の壁を触る。ザラリとした感触と指につく汚れ。季節は真夏のはずなのに何故かヒヤリと冷たい壁が、今のこの状況が夢でも死後の世界でもない、現実なのだと告げている。



壁の冷たさのせいか、身体が大きくブルリと震えた。急に肌寒さを感じた私は、冷房対策に持ち歩いてきた上着を出そうと、手にしていたはずのバッグを探す。だが周りを見ても落ちているのはゴミや埃ばかりで、どこにも見当たらない。

外出の際にバッグを持つ女性が多い。私もその一人。携帯や財布といった日常生活に必要な物の全てがそこに入っていたのだけれど……

——私は身体ひとつでここに立っているらしい。

その事実には心細さを感じつつ、外に出れば何かわかるかもしれないと、とりあえず歩き出す。階段から落ちる直前の一件が未だ尾を引いている私は、少しヤケクソ気味に先の見えない左側の通路を選んだ。

石の床にコツコツと靴音を響かせながら、曲がり角を覗き込んだ途端に視界が遮られる。

「お前っ！」

急に頭上から降ってきた怒鳴り声に悲鳴を上げる間もなく、強い力で腕を取られ捻られた。どうやら私の視界を遮ったのは、この声の主であるようだ。

突然の暴力に反射的に疎む身体とは裏腹に、苛立っていた私は攻撃的な態度で声を上げ抵抗する。

「い、痛いっ！ 離しなさいよっ」

「大人しくしろ！ 殺されてえのかっ」

低くドスの利いた脅し文句に、思わず腕を掴む男の顔を見上げた。

身長二メートルはありそうな、髭面の小汚い大男。藁のような白みがかかった金髪で、年は五十代

半ばくらい。その体格といい、顔立ちといい、どう見ても日本人ではない。そしてお世辞にも堅気とは言えない空気を漂わせている。しかしヤクザとも違う。マフィアでもない。何だろうこの感じ……。どこかで見たことがあるはずなのに思い出せない。

相手のやさぐれた雰囲気呑まれそうになりながらもどうにか口を開くが、紡ぐことの出来た言葉は何ともありふれたものだった。

「け、警察呼ぶわよ！ 今離してくれたら、見逃してあげるから！」

「ああん？ 何わけのわからねえこと言っただ。見逃すわけないだろうが」

そう言っただ大男は私をズルズルと引き摺りながら、私が進んでいたのとは逆の方向へ歩き出す。そして、先ほど見た三つの扉のうちの一つの前で立ち止まると、私を掴んでいない方の手でノブを回した。だがそれはガチンと音を立て、途中で止まる。

「はっ。ご丁寧に抜け出した後、鍵を掛けたのか？ 残念だったなあ、また出戻りだ」

ケタケタと馬鹿にしたような笑いを見せつけ、男は懐から取り出したシンプルな鍵を差し込んだ。ガチャリと大きな音を立てて扉が開く。乱暴に背中を押され、転がり込むように部屋の中に入ると、その背後で無情にも閉じられる扉。

「う、嘘！ ちょっと、冗談はやめてよ！ 開けてよ！ 開けなさいよ！」

慌てて扉に駆け寄り、ガチャガチャとノブを回し、扉を叩く。叩くことはないだろうとわかっている、諦めることなく数分もの間、扉を叩き叫び続けた。加減せずに叩き続けた手は赤くなり、痛みのためジンジンと痺れていたが、それでも叩くことを止めるわけにはいかなかった。

いくら私でもこの状況がヤバイってことはわかる！

「開けなさいよ！ 開けるってば！」

「うるせえ！」

ビリビリと空気が震えるような怒声の後、ゆっくりと開かれる扉。その隙間から出ようと駆け出した私を遮るのは、もちろん先程の大男。

「どいてよ！」

私のそんな声を、まるで聞こえていないかのように無視すると、手荒い動作で再び私の腕を掴み、後ろ手に捻り上げる。

「痛い、って言ってるでしょ！」

「お前が手癖悪いの、忘れてたんだよ」

大男はニタリと笑いながらそう言うと、背中で一まとめにした私の両腕を荒縄できつく縛り上げる。

「また鍵を開けられでもしたら面倒だからな。おちおち酒も飲めやしねえ」

縛り上げた両腕を満足そうに見つめた後、私を部屋の中央に向かつて無造作に突き飛ばした。人をこんなところに閉じ込めながら酒の心配なんて最低、と心の中で一人愚痴ってから、ふと気が付いた。

——日本語？

男は明らかに白人系の顔立ちをしているにもかかわらず、その口から紡がれる言葉は何故か流

暢な日本語だった。

日本語を話せる外国人も増えてはいるけれど……拭いきれない疑念が脳裏を掠めるものの、目前に迫る、硬い石畳への顔面ダイブの危機に意識が逸れる。慌てて顔を庇おうとしても、両手は縛られ自由が利かない。強い衝撃を覚悟してぎゅっと目を閉じた。

だが次の瞬間、硬い床ではなく、柔らかい何かに包み込まれる感触がした。

同時に「きゃっ」という小さな悲鳴がすぐ側から聞こえる。

ゆっくりと目を開けると、心配そうに私を覗き込む女性の顔があった。

一瞬驚いたものの、「受け止めきれなかったわ、ごめんなさいね。怪我しなかった？」という彼女の言葉で、ようやく状況が呑み込めた。

先程の悲鳴の主も彼女だろう。私を抱き止めようとして、尻餅をついてしまったようだ。

「すみません。あ、ありがとうございます」

慌ててお礼を言いながら立ち上がり、辺りを見渡す。

今の今まで自分の他に人がいることに気が付かなかったが、どうやらここには女性ばかりが集められているらしい。ざっと見た感じ、三十人程度か。

キョロキョロと落ち着きなく首を動かす私に「大丈夫？」「怪我はない？」「全く、ひどいことするわね」と女性たちは思い思いに言う、私をそっと座らせてくれた。

「ごめんなさいね。腕の縄、解いてあげたいんだけど……」

そう言って目を伏せる女性。他の者も同じように目を逸らす。勝手に解くとマズそうなのは理解

できた。

チラリと先程の扉を見るが、大男の姿はすでになく、扉もきつちりと閉じられている。落胆と同時に混乱が押し寄せるが、どうやらゆつくりと考える時間は与えてもらえないようだ。周りをぐるりと取り囲んだ女性たちから、矢継ぎ早に質問される。

「あなたも、攫さらわれて？」

「でも一度抜け出したのよね？」

「すごいわ、どうやったの？ 私たちにも出来るかしら？」

「珍しい服装をしているわね。でもそんなに薄着で寒くない？」

「この部屋にはいなかったわよね？ 他の部屋にも私たちみたいに攫さらわれた娘むすめがいるの？」

などと口々に質問されるが、聞きたいのはこっちの方だ。

「あの、少し聞いてもいいですか？」

問われたことには一つも答えないまま、おずおずと申し出ると「いいわよ、他にすることもなし何でも聞いてちょうだい」と私を受け止めてくれた女性が口を開く。

「私のことはビーと呼んで」と言って微笑む彼女。その笑顔に背中を押される形で、私は何とも聞の抜けた質問をするのだった。

「あの、ここは……？ 皆さんは一体……」

私の言葉に女性たちの表情が曇る。

「ここは、どうやら盗賊のアジトのようね。私たち、皆、攫さらわれてきたの。ここに来るまで目隠し

をされていたから、この場所がどこなのか正確なことはわからないわ。……でもアーリアから馬車で八時間は走ったはずよ？ アーリアほど寒くもないし、きつとアンドーヴァアの近くでしょうね」聞いたことのない地名。それに、今彼女は馬車と言わなかっただろうか？

その言葉にもう一度室内を見渡した。これだけの人数をいつときに攫さらうのだから、組織化された犯罪者集団であることは間違いない。そんな犯罪のプロが、移動に馬車を使用する？ 日本でなくとも悪目立ちしそうなものだが、馬車が日常的に使われている地域なのだろうか？ ……それならば、おそらく日本ではないだろう。

足を踏み外して階段から落ちただけなのに、日本ではない国の、馬車が移動手段になるような僻へき地に着地？

ありえない……一人、ひっそりと頭を抱える。

「アーリア？ アン、アンド？」

「アーリア、アンドーヴァアよ。アーリアは小さな町だから知らなくても不思議じゃないけど、アンドーヴァアも知らないの？ グラン王国の王都よ？ ……まさかグラン王国まで知らないとか言うんじゃないんでしょね？」

呆あきれつつも説明してくれるビーだが、冗談めかして言った最後の言葉に私が反論できずにいると、嘘うそでしょとばかりに目を見開く。周りの女性たちも、ヒソヒソと話しながらまるで珍獣でも見るかのように、こちらに視線を投げてくる。

正直、いたたまれない雰囲気である。

「ほ、本当に知らない？ グラン王国よ？ 魔法大国としてこの大陸で覇権を誇るグラン王国を知らないって？」

ビーのあまりの驚き様に、これはやらかしてしまっただか？ と思いつながらもコクンと頷く。そんな私を見て、ビーは黙り込んでしまった。グラン王国を知らないのは、それほどおかしなことなのだろうか？

ビーだけでなく、周りの女性たちも驚いている。だが、必死に世界地図を思い浮かべても、どの辺りかさえわからない。

それにさっき、ありえない言葉が聞こえたような。

——魔法大国、とかなんとか。

実は全てが冗談で、皆で私をからかっているだけなのだろうか？ それともとてつもなくリアルな夢？

本当に、昨日の一件から全て夢だったら良かったのに、と願わずにはいられない。

だが後ろ手に縛り上げられた腕の痛みと、床の硬く冷たい感触が、私の願望を否定した。

混乱は大きくなる一方だが、周りの反応を見るに、とりあえずこの場は取り繕った方がよさそうだと判断する。場の空気を読むのは、営業マンとして働いていた私にはお手の物。

「あの、すみません。魔法も何もないド田舎だったので、そういつたことに詳しくなくて……本当に、王様の名前すら聞かえてこないようなド田舎だったんです」

迂闊なことは言えないので、当たり障りのない理由を述べてみる。

「そ、そう。まあ、まだ魔法の行き届いてない山奥の村もたくさんあるから、それなら仕方ないのかしら？ でも、知つといたほうが良いわよ。これからどこに売られるかわからな……」

「売られるっ!？」

突然大声を出して話を遮った私に「当たり前でしょう、今更何を言っているの？」と、ほとんど呆れたと言わんばかりに答えるビー。

「何のために盗賊が若い娘を攫うと思っているの？ 売るために決まってるじゃない。この部屋にいるのも明後日まで、つてあの男が言ってたわ。明後日には奴隷の闇市に出されて、一番高い値段をつけた人の所有物になるのよ」

「奴、隷？ 闇、市？ 所有、物……」

淡々と語られる理解しがたい話に、思わず喉がゴクリと鳴る。

「そう。どんな人が主人になるかわからないんだから、出来るだけ不興を買わないようにしなくちゃ生き延びられないわよ。……だから、きちんと知っておいたほうがいいわ。小さな村では許されたことでも、大きな町や偉い人たちの前では許されることがあるのよ」

そう論じてくれるビーの言葉に、まずは現状を把握するべきだということを再認識する。これまでの会話で『かなり世間知らずの田舎者』という印象をもたれてしまったようだが、これ幸いと質問しまくることにした。

おそろくほぼ常識の範囲内であろう私の質問に、呆れながらも一つ一つ丁寧に答えてくれるビー。いつの間にか周りにいた女性たちは輪を離れて思い思いに過ごしており、その場に座り込んでいる

のは私とビーだけになっていた。

「ありがたい。これなら何とかやっていけそう、かな」

大量の質問を終え、最後まで付き合ってくれたビーにお礼を言う。

「まさかここまで世間知らずとはね。まだ少し心配だけど、私も人の心配ばかり出来る立場じゃないから。お互い、良い人に当たるといいね」

ビーは苦笑を漏らしながらそう言い残すと、腰を上げて別の輪に加わった。感謝を込めてその後ろ姿を見送る。

ようやく一人になったところで、改めて部屋を見回した。

部屋の広さは四十畳といったところか。装飾品や家具の一切ない質素な部屋。いや、部屋というのおおこがましい。床は石畳が剥き出しで絨毯一枚なく、壁に空気を入れ換える窓すらない。明かり取りのため、上方に嵌めごろしの小さな窓が数個あるだけだ。とてもじゃないが成人女性が外に出ることは不可能な大きさだ。

そんな空間に、私と同じ年頃の女性ばかりが二十七人閉じ込められていた。

ビーの話によると、この場所はおそらくグラン王国の王都アンドーヴァーに程近い盗賊の隠れ家。奴隷として売るために各地から攫ってきた娘を一旦收容する場所のようだ。

そして信じられないことに、この国には魔法があるらしい。

その不思議な力は他国には存在せず、このグラン王国の、それも一握りの者にしか現れない特殊な才能だという。

魔術の素養を持つ者は、出自にかかわらずそのほとんどがグラン王家直属の軍——魔術師団と呼ばれるエリート部隊に配属される。そのためこのグラン王国は、近隣で最も恐れられる軍事強国とのことだ。

魔法がある代わりに科学という概念はない。話を聞く限り十九世紀のヨーロッパに近い生活様式のようなだ。服装もキャミソールやショートパンツなど着ていたら破廉恥と思われるしまいそうなほどに露出が少ない。ここにいる女性たちも、その多くが首元から手首、足首までを服で隠していた。また、赤毛や金髪の女性が多く皆、白人系だ。そういえばあの大男も、白みがかつているとはいえ金髪だった。

アイツを最初に見たときに覚えた既視感。それこそが答えなのかもしれない。

昔見たファンタジー映画の山賊の服装にそっくりだった。

そう、ファンタジー。魔法があつて、科学の概念がなくて、盗賊がいて、見た目は白人なのに何故か日本語が普通に通じる……

そんな国が、大陸が、地球にあつただろうか？ 考えるまでもなく否定する。

頭の中で整理すればするほど、私の考えはありえない答えを導き出す。だが、本当にあるのだろうか。

——『異世界』などというものが……

私の頭は同じところを行ったり来たり。何度も同じことを考えるうちに、次第に感覚が麻痺してくる。

ああ！ もう異世界だろうが、あの世だろうが、どこでもいい気がしてきた。  
それよりも、この部屋から抜け出す方法を考えなくては。奴隷など真つ平ごめんだ。一刻も早く日本に帰ろう……

『本当に帰りたいの？』そう問いかけるもう一人の私が出たが、奴隷という境遇に比べれば、日本での修羅場の方が遥かにマシだ。

しかし縄を打たれている今の状態では、脱出どころか立ち上がることもさえ一苦勞だ。何とか解くことが出来ないものかと、引つ張ったり腕を捻ったりしてみようが、粗い縄の繊維が肌に食い込むだけだった。

傷ついた手首から流れ出たのだろう。ヌルリとした血の感触とピリツとした手首の痛みには耐えられなくなった頃、自力で縄を解くことは諦め、他の方法を考えることにした。ここにいる女性全員で逃げ出せる方法を見つけたら、きっと誰かがこの縄を解いてくれるだろう。そう思って知恵を振り絞るものの、この建物の間取りも、盗賊が何人いるのかもわからない。

意を決して立ち上がり、ビーのいる輪に向かつて歩く。こちらを向いて座っていた数人の女性が私に気付き顔を上げると、それにつられるようにビーも振り向いた。

「どうしたの？ っていうかあなたの名前、聞いてなかったわね」

先程と同じく、ビーが気さくに声をかけてくる。

「そういえばそうでしたね、すみません。長谷川、結花です」

「ハセガワ・ユカ……変わった響きね。この辺りではあまり聞かない名だし、本当に田舎から来た

のねえ。ハセガワ、と呼ばば良いかしら？」

ビーの問いに黙って肯きながら、その輪に加わるべく彼女の隣に腰を下ろした。

「ハセガワ、まだ他に聞きたいことがあった？」

「この建物の間取りとか、盗賊の人数とかわかりますか？」

その言葉に顔を見合わせる女性たち。だが皆、首を横に振る。

「残念だけど、私たちも詳しくないわ。おそらく一度は部屋から逃げ出せたハセガワが一番詳しいと思うわよ」

「私もすぐに捕まってしまったので……」

ビーの言葉に女性たちの瞳が一瞬輝くが、私の返事を聞いて、すぐに失望の色へと変わった。

「そう。来るときに階段を上らされたからこは二階だと思っけど、出口の場所や見張りの人数まではさすがにわからないわ。ただ、最近世間を騒がせている盗賊団はかなり大所帯だって噂よ。彼らがそうとは限らないけど、もしその盗賊団なら、四十人から五十人はいるはずだわ。ここに残っている見張りもそれなりにいると考えるべきでしょうね」

彼女の話で、皆諦めたように視線を下に落とす。かくいう私も例外ではない。武術の達人でもない二十代のか弱い女性が、五十人もの荒くれ者を相手にどうこう出来るはずがない。

ファンタジー世界だし、魔法があるというのなら私にも使える可能性はゼロではないはず。そう思って、『縄よ、焼け落ちろ！』と後ろ手にされた指先に神経を集中させてみたものの、凡人の私にそんな奇才が備わっているはずもなかった。

仮にポツと炎が指先から出たとしても、ライター程度の小さな炎で、どうやって戦うというのだ。自決を除外すると、私たちに残された選択肢は、

——一つ、見つからないように逃げ出す。

——二つ、誰かが助けてくれるのを夢見て待つ。

——三つ、大人しく売られて、少しでも待遇のマシな奴隷となる。

この三点であった。

最も現実的なのは……当然、三つめの選択肢。他の女性たちも皆、すでに諦めモードで大人しく座っている。最後まで諦めが悪かったのは、こんな世界に飛ばされた挙句最悪の状況におかれている、完全とぼっちりの私、だろうか。

そんなこんなでどうすることも出来ないまま、『商品』である私たちが死なない程度に差し入れられる最低限の食事を食べ、闇市に出される日を待つしかなかった。と言っても腕を縛られている私は、一人では食べ物を口に運ぶことすら出来ず、面倒見の良いビーに食べさせてもらったのだが、

——ついに明日の朝、競りにかけられる。

一体どうなるのだろうかと思わずとし、一睡も出来ぬまま夜が明けてしまった。明かり取りの窓から見える、白み始めた空がこれほど忌々しく思えたのは今日が初めてだ。

きつと、今日という日を忘れることはないだろう。

そんなことを考えていると、早朝に似つかわしくない音が部屋に響く。

ドタドタ、バタバタという慌ただしい足音。これが私たちを迎えに来た死神の足音なのかと、覚悟を決め苦々しい気持ちで目を閉じた。

複数の騒々しい足音に混じり、微かに聞こえる金属音。小さな破裂音も数回。少し静かになったと思ったら、まるで花火のようなドオンという爆発音が轟く。建物全体が音とともにビリビリと揺れ、その衝撃の強さを物語る。

——このとき、ようやく何か変だと気が付いた。

だがその状況は長く続かず、数分もするといつもの静かな状態へと戻る。

固唾を呑んで息を殺し、耳をそばだてるも、もう音はしない。

何が起こっていたのか判断がつかず、不安からドキドキと速くなる鼓動。緊張のため、数分が数十分にも感じられる。大勢の人間がいるとは思えないほどに、シンと静まり返った室内。そのため耳のすぐ傍に心臓があるんじゃないかと思うぐらい、自分の鼓動がうるさく感じられた。

唐突に、ガチンというノブが回される音が大きく響き、私の脈が跳ね上がる。

だが、鍵の掛かっている扉は開かない。

閉じられたままの扉を、瞬きも忘れてじつと凝視していると、爆音と同時に扉が消えた。

——いや、消えたのではない。粉碎されたというべきか。

もうもうと立ちのぼる粉塵が収まり、そこに佇む二つの人影が見えた瞬間、部屋中から歓声が上がった。驚いて周りを見渡すが、状況を呑み込めていないのは私一人のようだ。女性たちが泣きながら笑顔で抱き合っている姿を見て、どうやらこの状況は良いことらしいと判断する。

その考えを裏付けるように、銀色の甲冑かっちゅうを着込んだ男たちが続々と部屋へ入り、女性たちを気遣いながら保護していく。それを見て、ようやく助かったんだという実感が湧いたのだった。

部屋の隅で、安心して座り込んでいる私に近づくと一人の男。助かったのである。うこと以外、いまいち状況が掴めない私は、その男をじっと見つめる。私をこの部屋に放り込んだ、につつきあの男と同じくらいに体格だろうか。

だが、その印象は真逆のものだ。

清潔感溢れる短めの黒い髪に、キリリとした顔立ち。使い込まれた感じの、だが丁寧に手入れをされている銀の甲冑かっちゅう。歩く姿にも洗練された雰囲気がある。もう見た目からして爽やかさ百点満点まさに正義の味方といった風貌だ。そのヒーローが、私の傍そばに来てしゃがみこむ。

——ありえないと諦めていた最良の選択肢『誰かが助けてくれる』だ。

それも最上級の男前ときた。これでテンションの上がない女は、女であることを辞めてしまえ！そんなことを考えるぐらい、私のテンションは急上昇していた。

「大丈夫か？」

「は、はい」

低く男らしい声で優しく問いかけられ、勢いよく返事をした声は少し上擦うわすってしまった。

「立ち上がれるか？」

そう言っって手を差し出してくれたものの、後ろ手に縛られた状態の私は、その手を取ることが出来ない。

ああ、もつたいない……。こんな男前に自然に触れられるチャンスだというのに。私にこの縄を引きちぎる力があれば……！

疲弊した身体をもぞもぞと動かしただころで、男性が私の状態に気付いたようだ。

「腕を……酷ひどいな。女性にこんな仕打ちをするなんて男の風上にも置けぬ奴だ。待て、今解ほどいてやるから、そのままじっとしている」

男性は慣れた手つきでブーツの踵かかとから小さなナイフを取り出すと、縄を切ってくれる。腰はに佩はいている大きな剣でなくて良かった。それだと腕まで一緒に切り落とされそうで、正直怖こすぎる。男前ともなるとそんな心配りも出来るのね、と的はずれな感想を抱きながら、私はようやく縄から解放された腕を動かそうとした。しかし二日ぶりに自由を取り戻した腕は、痺しびれて関節が固まり、全くと言っていいほど動かせない。

「い、痛っ……」

ギギギッと油の切れたロボットのように軋きむ腕を、何とか身体の前まに動かすだけで精一杯だ。それまで麻痺しびしていた痛覚が一気に戻ったようで、痛みに大きく顔を歪よめる。

「しばらくは凝こり固まった筋肉が痛むだろうが、我慢してくれ。腫はれてはいないし、骨も異常はないだろう」

私の腕を確認しながらそう言っった男性の視線が、手首で止まる。

「……手首から血が出ているな。他の者は拘束されていなかったのに、何故お前だけこのような扱いを受けたのだ？」



「い、一度、逃げ出して捕まったので」

「そうか、すまなかつたな。もっと早くここを突き止めることが出来たら良かったんだが」

「いえ、本当に助けてくださってありがとうございます」

今までに、これほど心を込めて「ありがとう」を言ったことはない。そのとき、男性の背後から見事なプラチナブロードの髪をベリーショートにした、青い目の人物が姿を見せた。スラリとした長身が中性的な雰囲気醸し出している。だがその肢体を包んでいるのは、目の前の男性が着ている金属製の甲冑ではなく身体にピタリと沿う黒い軍服であったため、何とか女性だと判断できた。

「キヤリスター様」

「ああ、ナセルか。ちようどいい所に来たな。これを治してやってくれないか？」

ナセルと呼ばれた女性は小さく頷くと、私の傍に跪きそと私の手を取る。じつと手首を見つめていたかと思うと、ふう、と一息を吐き出した後、形のいい眉をひそめながら口を開いた。

「これは……酷いですね。傷自体はたいしたことはありませんが、手当てがされなかつたために化膿しています」

「出来るか？」

「この程度なら大丈夫だと思います」

そう言うなり手のひらで私の手首を包み込むと、綺麗な青色の瞳を伏せ、唄うように言葉を紡ぐ。その言葉に反応したのか、突如異変が起こった。

私たちを取り巻くように現れた光の粒子が、結合しながらふわふわとナセルさんの手に——私の

手首に吸い寄せられる。ほんのりと温かい光の玉が連なる様は、まるで真珠のブレスレットを巻きつけたようである。

綺麗だが得体の知れない光景に、思わず掴まれていた腕を振り解こうとした。だがナセルさんの力を見た目よりもずっと強く、実際はほんの僅かしか動かすことが出来なかつた。

私のそんな行動を咎めるように、ナセルさんは言葉を紡ぎ続けながらも伏せていた瞳をチラリとこちらに向ける。静かな湖面を思わせる青色の瞳に見据えられ、咄嗟にすみませんと謝ると彼女は満足げに再度目を伏せた。

防衛本能に任せて動いてしまったが、どうやら本当に治療してくれているらしい。徐々に引いていく痛みからそう思えたが、やはり少し気味が悪い。

彼女がそと手を離れたときには、手首の擦過傷はきれいに治り、縛られていた部分に少し赤味が残る程度になっていた。

これが、魔法？ 信じられない。でも、そうとしか……

目の前に突きつけられた『異世界』の証拠をなかなか受け入れられない。しかしタネも仕かけもないことは、自分の身体である以上明白で。となるとやはり……

困惑する私を余所に、ナセルさんとキヤリスターと呼ばれていた男性は話を始める。

「これでもう大丈夫でしょう。すみませんが、さすがにこれ以上は魔力が持ちそうにありません」

「ああ、無理をさせてすまない。後は一般兵に任せたらいい、ナセルはもう戻れ。魔術師長殿には俺から言っておく」

「はい。失礼いたします」

二人の会話は耳に届いているものの、混乱しているせいで意味を為さない言葉の羅列として通り抜けてしまう。

しばらくして、怪我を治してくれた彼女にお礼の一つも言っていないことによりやく気付いた。慌てて姿を探したけれど、すでに見当たらない。

「あつ、あの、先程のナセルさんはどちらに？」

「探せばまだそこらにいるかもしれないが、どうした？ 他に痛むところでもあるのか？」

「違いますっ、おかげさまでもう痛みはありません。それなのに私、お礼を言いそびれてしまつて」

「こんな大変な状況だ。彼女もそんなこと、いちいち気にしていないさ」

なんだそんなことかと笑いながらキャリスターさんは言ったものの、いまいち元気がない私を氣遣ってくれたのだろう、

「気になるなら探してみよう、少し待て」

と言つて、ナセルさんを探すべく歩き出した。この場所で一人になりたくなかつた私は、キャリスターさんの後に付いて行く。閉じ込められていた部屋を出て、階下に降りる途中で一人の男性とすれ違つた。

「ああ、レイナード。良いところに」

キャリスターさんの呼びかけに、私たちの脇を素通りして行こうとしていた男性は立ち止まつた。が、振り返る様子はない。そんな男性の態度を気にする素振りもなく、親しげに話しかけるキャリ

スターさん。

知り合いなのだろうか？ だとしたらこの男性の態度はあんまりだと思ふのだが……

「ナセルにこの娘の治療をしてもらつてな。魔力が尽きそうだと言つていたので、先に城に戻らせたらからな」

キャリスターさんの言葉を聞いて、男性はようやくこちらを振り返る。

目があつた瞬間に身体が固まつた。

不機嫌そうにこちらを射抜く双眸はひどく冷たい。気まづさに思わず視線を逸らした。

だが私にかけられた言葉は、想像していたよりも優しいものだった。

「怪我をしていたのか？」

こちらを氣遣うような質問に、逸らしていた視線を男性に戻し——後悔した。

形の良い唇、その端を嘲るように吊り上げ冷笑を浮かべる姿からは、どこかサディスティックな印象を受ける。まるで月の光を編んだような銀色の髪と瞳が、冷酷な雰囲気よりもいつそう際立っていた。

その表情は私を氣遣うというよりも、攫われた女性たちの中でただ一人怪我をした愚鈍な奴と、馬鹿にしているように感じる。私の被害妄想だろうか？

顔立ちはずごく整っているのに、どこか禍々しいものを感じて足が震える。

み、味方でいいのよね？ どちらかと言えば敵、しかも、ラスボスとか魔王って感じなんですけど……



私に問いかけているのはわかったが、言葉がどうしても口から出てこない。盗賊の大男に腕を掴まれていたときでさえ、反発できたのに。

見られているだけで、息苦しいほどの威圧感なんだけど。

「怪我といっても小さなものだ。彼女だけ手首を拘束されていたからな」

私の代わりにキャリスターさんが口を開いた。その説明に私への興味をなくしたのだろう、ふいと視線が外される。

その際に、そつとキャリスターさんの背に隠れた私は、知らず知らずのうちに止めていた息をゆっくりと吐き出した。

「勝手にナセルを帰らせておいてなんだが、彼女がまだこの辺りにいるか調べてもらえないか？」

「魔術師に用事なら、俺が聞くが？」

「いや、この娘がナセルに礼を言いそびれたと残念そうに言うものでな」

私の前に立つキャリスターさんは、平然と会話を続ける。

「……………もう、いないな」

「そうか、お前がそう言うなら仕方ないな」

「呼び止めた用はそれだけか？」

「ああ、忙しいのにすまなかつたな」

愛想笑いも会釈もないまま再び歩き去る男性を無言で見送ったところで、私はキャリスターさんに疑問を投げかける。

「あの人誰なんですか？」

「ああ、あいつは俺の友人で、レイナード・ロゼフィン。魔術師団を率いている魔術師長、つまり魔術師のトップだ。何しろ魔力が桁外れでな、他の魔術師たちが束になってかかっても勝てないだろうな」

やはり味方で正しかったようだ。その言葉に、どこか安堵する。あの男性が敵であったなら、キャリスターさんといえども勝てそうにない。

「束になっても……そんなに強いんですか？」

「あいつの本気などついぞ見たことがない。陛下や宰相がどれほどの無茶を言ったとしても、顔色一つ変えずにやつてのける。お前も……どの村から攫われてきたのか知らないが、聞いたことぐらひはあるだろう？ この国に張られている魔法障壁のことは」

「魔法、障壁……ですか？」

「聞いたことがないのか？ この国を囲むようにして巨大な障壁が張られているんだ。普段は意識すらしないが……例えば、どう見てもグラン王国の民でない者とも会話が成り立つだろう？ それは魔法障壁の補助効果だ」

じゃあ、私が今言葉に不自由しないのは、その障壁のおかげってことか。

日本語が通じるのを不思議に思いながらも、『ファンタジーだから』で済ませるところだった。

「目的は『国の防衛と発展のため』。つまり、他国の侵攻を防ぐ目的と、諸外国の者たちとの言葉の壁をなくし、流通を活性化させる目的で始めたことだと聞いている」

黙り込んだまま違うことを考えていた私を見て、勘違いしたのだろう。キャリスターさんは話を止め、「難しかったか？」と困ったような表情で首を傾げた。

「いえ、大丈夫です。続けて下さい」

「えー、なんだ、その素晴らしく複雑で巨大な魔法を、一人で安定させてしまえるほどの力の持ち主、だと言いたいんだが」

——ん？ ということは……今、普通にこうして話せているのは、あの陰険そうな男のおかげ？ なんか素直に感謝しづらいなあ。

「それって、普通の魔術師では無理なんですか？ やっぱり」

「そうだな、まず一人では絶対に無理だろうな。たとえ張れたとしても、数秒ともたずに魔力が枯渇するだろう。それを何年もの間ずっと張り続けながら、他のことも出来るんだ。そんなわけで魔術師団にいる連中は、皆あいつに憧れている」

「ずいぶん慕われているんですね。あの、失礼かもしれませんが、そんな風には見えなかったんですけど。キャリスターさんにも失礼な態度でしたし……」

そう言いながら、先程の背を向けたままの態度や、人を馬鹿にしたような笑いを思い出す。

「そうか？ 魔術師長と言えば国の要職だからな、あんなもんだらう。俺とは少し年の離れた友人ということで、気安い態度も大目に見てもらっているが」

確かに、四十代であろうキャリスターさんと先程の男性では、年が一回りは違うだろう。

「魔術師は総じて取っ付きにくい者が多いが、あれはそんなレベルではないからな。興味があるこ

と以外は無視するくせに、沸点だけは異様に低い。あんなクールな顔して、キレると手に負えない。俺も友人と認めてもらえるまで、かなり時間がかかったもんだ」

はっはっはと白い歯を見せて豪快に笑うキャリスターさんだったが、本題を忘れないあたりはさすがと言うべきか。続けて「ナセルのことだがな」と口を開く。

「魔術師はお互いの気配を探ることで、居場所がわかる。魔術師長ともなれば細かな場所まで特定できるだろうが、その彼がここにはいないと言ったんだ。残念だったな」

それを聞いて肩を落とした私を「それほど気になるなら、俺が後で言っておいてやるから」と、優しく励ましてくれる。それで私もようやく笑顔を見せることが出来た。

「ではそろそろ良いか？ もう他の娘たちも全員保護し終えただろうし、お前も一旦そちらに行くといい。風呂や飯が用意してあるはずだ。医師もいるからな、何かあれば相談しろ」

私を安心させるために言われたであろう言葉で、現実に戻される。

無言で頷きながらも、不安が湧き起こるのを止められなかった。

キャリスターさんの後について、攫われた女性たちのために設けられたという臨時の救護所に向かう。これで数日は寝床とご飯の心配はしなくてもよさそうだ。

だが問題が先延ばしになっただけで、根本が解決しなければ状況は変わらない。

このままだとそこを放り出されたら、一文なしの宿なしだ。頼る相手もいなければ、自立するための仕事もない。せっかく助けてもらったのに、未来は果てしなく暗かった。このままでは無銭飲食や盗みをして犯罪者になるか、身体を売って生計を立てるしかない。

それだけは何としても阻止したい。形振り構っている場合じゃない。

——生活の基盤を整えなくては！

魔法があるというのなら、いつかは日本にだって帰れるかもしれない。

でもその『いつか』の心配よりも、まずは一週間後や一月後の心配だ。日本に帰る方法は、こちらでの生活が落ち着いてから調べればいい。

助け出された直後だと言うのに、私が思いつめた表情をしていたからだろう。横を歩いてきたキャリスターさんが足を止め心配そうに覗き込む。

「どうした？ まだ何かあるのか？」

「あの、皆さんはこの後どうなるんでしょう？」

「皆さん？ 助け出された娘たちのことか？ あの者たちならば、こちらで少し体調を整えたら皆自分の家に帰るだろうな。まだ若い娘たちだ。親も心配しているだろうし……どうした？」

予想通りの答えに、気持ちさらさら暗くなる。

何とかしなくては……チラリとキャリスターさんを見上げ、気付かれないよう値踏みする。表面的なもの名前ぐらいいし知らないが、今まで知り合った中では一番だろう。

——まあこの世界で知り合った人物と言えば、盗賊とその被害者たち。キャリスターさんと魔術師のナセルさん。それにあの魔王モドキの魔術師長くらいなのが。

キャリスターさんは、少し年は上だろうが、顔も性格も悪くない。魔術師（エリート）のナセルさんから敬称付きで呼ばれていたし、先程の魔術師長（超エリート）とも親しげに会話していた。きつ

とそこそこの地位にいるに違いない。

ということとは……それなりにお金も持っていていそうだ。お世話になるのも、ありかもしれない。もし断られたとしても、失うものなど端から何もない。

敵を退治したら、後は部下に任せてはい終わり！ でなく、一介の被害者にすぎない私にも気を配ってくれる人の良さそうな彼なら……

覚悟を決めた私は、チロリと乾いた唇を舌先で湿らすと口を開く。

「あの、実は私、帰るところがなくて……」

キャリアスターさんの手を取り、上目遣いに言葉を続けた。

「ここを出た後、どこに行けばいいのか……」

「元の村に親や親戚はいないのか？」

同情を誘うようゆっくりと首を横に振る。

「知り合いもないのか？」

眉を八の字にし困った表情を見せた後、私はそつとうつむき首を静かに横に振る。

「そうか……」

「……」

重たい沈黙が二人の間に流れる。

ここで『では私のところに来るか？』という言葉期待していたのだが、なかなか思い通りにはいかないようだ。舌打ちしたい気分だが、まあ当然と言えば当然か。世の中それほど甘くない。見

ず知らずの人間を即決で家に招いてくれるような善人に、そうそう巡り会えるはずもないのだから。私だってこんな場面に直面したら、せいぜい警察に案内しておしまいだろう。間違っても自分の家など連れ帰らない。

とはいえ、ここで諦めることは出来ない。私の人間としての尊厳が懸かっている。先程までの惨めで屈辱的な数日間を思い出し、肌粟立つ。

——あんな暮らしには戻りたくない！

何とかしてキャリアスターさんの背を押せないものだろうか。

「すみません、助け出して下さった恩人に向かって……。知り合いでもないのにこんな相談して、凶々しいですね。……自分で何とかします。忘れて下さい」

本当に忘れられては困るのだが、押してダメなら引いてみるだ。自分の持つ演技力を総動員する。

お願い、何とかこれで騙されて下さい！

下を向いたまま、流れてもいけない涙を手で拭うフリをし、チラリと見遣ると、彼は陥落間近であった。

「……つわ、私の所でよければ好きなだけいてくれ」

その言葉に、待つてましたとばかりに勢いよく顔を上げる。

良かった。あっさり『そうか』なんて引かれたらどうしようと思っていた。

「ち、ちが、違うからな。私にはちゃんと妻もいるし、変な意味ではないからな、安心しろ」

私の反応に勘違いしたのか、慌てて説明するキャリアスターさん。

ちっ。なんだ、奥さんいるのか。じゃあ、あまり長居は出来ないなあ。でもしばらくは厄介になるう。そう決めると先程の泣きマネはどこへやら。涙の跡一つない満面の笑みで「よろしくお願います！」と元氣良く頭を下げるのだった――

この屋敷に来て、早半年。

干したばかりの洗濯物がパタパタとはためく横で、私は抜けるような青空を見上げた。風にのって香る柔らかな花の匂いを吸い込み、考える。

結論から言うと、あのときキャリアスター様と出会えたことは、私にとってこれ以上ない幸運だった。それほどにキャリアスター様は『いい人』であった。

こんなに長く世話になるつもりはなかったのだが、キャリアスター夫妻はとても親切で、嫌な顔一つせず面倒を見てくれる。と言ってもさすがに何もしいわけにはいかないので、日々こちらのお屋敷のメイドに交じって汗を流し働いている。夫妻はそんなことしなくていいと言ってくれるが、私の気持ちの問題だ。あのとき私がいらんだとおり、キャリアスター家はとても裕福だった。

私を助けてくれたカイン・キャリアスター様は騎士団の団長。

妻のアビゲイル様はなんと元メイド。玉の輿である。そのため私たち使用人にも、とても気さくで優しい。外見も内面も美しい女性だ。

少し年の離れた夫婦だが、カイン様は若く元氣な妻を年上男性らしい包容力で慈しみ、アビゲイル様もそんな夫をととても尊敬し、一目でそうとわかるほどにラブラブな二人だった。

そんな夫妻の間には、疑念など微塵も生じることはないのだろう。アビゲイル様は夫が突然連れ帰った私のことを愛人と疑うこともなく、とても親切にしてくれる。

王都では、日常生活にも魔法の力が及んでいるおかげで仕事もそれほどきつくなく、楽しく過ごしている。地方の村などでは魔法の恩恵がほとんどないため、家事だけでもかなりの重労働らしく、本当に王都で良かったなと改めて思う。

当初は、ここでの生活に慣れたら日本への帰還方法について調べてみるつもりだった。

だがここに来て二ヶ月も過ぎた頃には、日本に戻りたい気持ちなんてなくなっていた。両親や弟、それに友達に会えないのは心残りだが、私を裏切った圭介と浮気相手の後輩と顔を突き合わせて仕事などしたくない。

かと言って、厳しい氷河期を乗り越えて入社した今の会社と、営業マンとしてのキャリアをむざむざドブに捨てるのも忍びない。

そもそも何故、何にも悪くない私が逃げるように会社を辞めなければならぬのだ！ 辞めるべきなのはむしろあの二人だ。だが彼らは、絶対に辞表を提出などしないだろう。

男からのウケだけは非常に良かった後輩のこと。「私のせいでお二人が……」なんて小芝居で周りの同情を引いた挙句、私に結婚式の招待状を送りつけてくるに違いない。

圭介だって、「社内で二股なんてモテる男は違いますねえ」というおだてに乗っかって、「俺って罪な男だよなあ」なんて調子に乗るのが簡単に想像できる。かつてはそんなおちゃらけた一面も可愛いなどと血迷ったことを思っていたが、今では想像しただけで腸が煮えくり返る。そんな嫌なこ

とばかりが待ち受ける日本よりも、この『異世界』の方がどれだけ快適なことか！

だから私は決意した。

「こっちでお金持ちを見つけて、玉の輿に乗ってやる！」

アビゲイル様だつて元はメイドなのだ。決して夢物語ではない。

素敵なダーリンを捕まえたら、魔法で一日だけでも日本に戻つてあの二人を見返してやるんだ！文句の一つもぶつけることが出来ないままこちらに来てしまった私は、せめて「今幸せなの！そんなろくでなし、のしつけてくれてやる！」と高笑いをかましたいと、変な野望を抱くようになっていた。

そのためには、まず出会いがなければ。

カイン様は超優良物件だが、売約済み——既婚者なので除外。カイン様に限つてありえない話だが、仮に私になびいたとしても浮気をする男なんて必要ない。

私が男に求めるものは、浮気をしない誠実さと、多少の贅沢ができる経済力。この二点は決して譲れない。欲を言うならあまり地位が高くない方がいい。いざ結婚、という段階で詳しく調査され、私の素性が公（あや）になってしまふことは避けたいからだ。

顔やスタイルについてはあまり高望みしないが……標準は欲しい。不細工よりはイケメン希望だが、ルックスが良いと浮気の心配があるから難しいところだ。

結婚相手の希望項目を心に書き留めながら、屋敷を見渡す。使用人の中にも男前はいるが、職場恋愛はもうこりこりなので却下。それにせつかくのファンタジー世界なのだ。日本には存在しなかつ

た職業——騎士や魔術師と恋愛してみたいという思いがあった。

騎士団長が住んでいるこの屋敷には当然騎士が入りするものの、さすがにカイン様と仕事の話をしに来ている者をナンパするほど恥知らずではない。

だからいずれはここを出て、もう少し出会いがありそうな職場に移ろうと考えるのだった。

そんなある日。

屋敷に飾る花を摘もうと、庭の一角にしゃがみこんでいた私の耳に、馬の足音が届く。その足音や嘶いななきから察するに、五、六騎はいるようだ。

騎士団長ともなれば屋敷を訪れる者は多いが、一度に大人数が押し寄せることは稀まれだ。いつもは二、三騎程度なので、それに比べるとずいぶん多い。

……まさか、私の不法就労がバレて捕まえに来たとかではないよね？

カイン様に『三食・自室に自由付き』という高待遇で拾ってもらった私。せめてものお礼としてメイドの真似事を始めたにもかかわらず、ご厚意でお給金まで頂いている。

本当にまずい状況になったら逃げよう、なんて考えながら、植えられている木々に隠れつつそつと正門へ近づく。

「一、二、三……六、七、七人か」

客人から馬を預かった馬丁ばていが、厩舎きゆうしやの方へ歩いていく姿が見える。その手前に青い軍服を来た男性が四人。これはカイン様が着ているのを見たことがあるので、騎士の隊服だとわかる。というこ



とはカイン様の部下だろう。その横に黒い軍服を来た男性が三人。どこかでこの服を見たことがあるような気もするが、思い出せない。

「ん？」

私はそこに見覚えのある人物を見つけ、目を見張る。

「あっ！ ああ！ ナセルさん！」

黒い軍服をスラリと着こなす長身短髪あの人は！ あのととききちんとお礼を言えなかったことを、今でも忘れていない。私はこそそと隠れていたことも忘れ、足早に駆け寄る。

近寄ってくるメイドに気付いたのだろう。軍人特有の鋭い視線を受け、身が竦む。カイン様が気さくな人なので普段はあまり意識しないが、騎士や魔術師はこの国のエリートなのだ。

やっぱり、一介のメイドが気軽に話しかけちゃいけないんだろうか？

「その娘、何用だ。キャリスター様の屋敷のメイドか？」

突如動かなくなった私に、一人の騎士が怪訝そうに声をかける。

「はい。ここでお世話になっておりますメイドにございます。半年ほど前、そちらのナセル様に傷の手当をしていたのですが、お礼をお伝えすることが出来ないままでした。まさか再びお目にかかれるとは思いません、嬉しさのあまり無礼を働いてしまいました。申し訳ございません」

私の説明に、騎士は警戒の色を少し弱め、ナセルさんに尋ねる。

「ナセル殿、心当たりが？」

「いいえ」

思い出そうとする素振りさえなく、即座に否定する彼女。

その返答を聞き、周りの騎士たちの間に微妙な空気が流れる。当然、忘れ去られていた私自身もかなり気まずい。

なんとかその場を取り繕おうとしたのか、ナセルさんに問いかけた騎士が困った表情のまま口を開いた。

「あー、そうですか。しかしでませなら一介のメイドが、ナセル殿の名を知っているのもまた不自然ですしねえ……」

どうするのだ？ といった様子でこちらに視線をよこす騎士。

「え、っと。ナセル様は覚えていらっしやらないかもしれませんが、あときは本当にありがとうございます。今までお礼も言わずに申し訳ありませんでした」

とりあえず言うだけ言って仕事に戻ろうとペコリと頭を下げたとき、聞き慣れた声でした。

「なかなか来ないと思ったら、何をしているんだ？」

「カイン様」

「団長」

いつの間に屋敷から出てきたのか、呆れたように首を傾げながら立つカイン様。

「ん？ ユカか？ どうした、何かあったのか？」

頭を下げていた私を見て、「お前たち、寄つてたかつて虐めていたんじゃないだろうな？」と私と向かい合う形で立っていた一人の騎士を睨みつける。

「まさか！ こちらの娘さんがナセル殿にお礼を言いたいと近寄ってきたのですが、ナセル殿には覚えがないらしく」

「礼？ あー。まったく……ユカは義理堅いというか、諦めが悪いというか。まだ覚えていたのか。ま、そういった律儀なところがユカの美点でもあるのだがな」

カイン様は私を見て苦笑を漏らしながらそう言った後、今度はナセルさんに向かって口を開く。「本当に魔術師は他人に興味がないな。ナセル、覚えていないのか？ ほら、あれだ。半年前に大規模な盗賊の隠れ家を叩いただろう？」

「ああ、あのときの娘か」

カイン様の説明に納得の声を上げたのはナセルさんではなく、その傍に立っていた銀の髪の男性だった。

——あつ、あのときの……魔王！

咄嗟に出てきたのは、第一印象。

「レイナード、まさかお前が覚えてるとは思わなかったな」

カイン様が心底驚いたといった表情で言う。

「覚えている。多数の娘たちが攫われた中、唯一怪我をしたという鈍臭い娘だろう？」

は？ はああああ!? ちょっと、なんて覚え方してんのよ！

ひどい言い様に、心の中で絶叫する。

「お前は、なんていう覚え方をしているんだ……」

はあー、と大きくため息を吐きながら首を振るカイン様。もつと言ってやって下さい、と心の中で応援する。

「キャリスター様、私も思い出しました。師長様が一緒におられたのなら、あの一件ですね。確かにあのとき、被害者の怪我を治療した覚えがあります。あなたですか？」

そう言っつてこちらをじつと見つめる青い瞳。

「はい。遅くなりましたが、あのときは本当にありがとうございます」

「いえ、任務です」

一応の決着がつき、思い出して良かった良かった、といった雰囲気の中、彼らは屋敷へと入って行く。どう考えてもオマケのような思い出したのが気になるが……。私にとつては恩人でも、彼女にしてみれば助けた大勢のうちの一人に過ぎないのだろう。

無理もないか、とそんな彼らを笑顔で見送る。騎士の一人が「良かったな」とこちらを振り向き微笑んだので、ニコリと笑っつてお辞儀を返した後、慌てて仕事に戻るのだった。

そうして真面目に働きながらも、日々新しい出会いを求め、良い男アンテナを張り巡らしていた私。そのアンテナが、ついに捉えた一人の男性。当初の目論見とは異なり、騎士や魔術師ではないものの、王都で人気の店を構える仕立て職人だ。名前はフェンド。金髪に緑の瞳の優しいような男前で、仕事柄なのかとてもオシヤレだ。

そんな彼からのプレゼントは気の利いたものが多く、身一つで異世界に來た私にはとてもありが